

山折哲雄氏

梅津睦郎

文語日誌 平成二十四年彌生三日

三月三日は雛祭りなり。夕刊を見、昭和六十三年のその夜を思ひ起す。當日、「世界宗教者會議」京都にて催され舊友山折哲雄（國際日本文化センター）その實行委員長を務めたり。吾知識何も無く、様子を見に參ぜり。

各國より數百人の宗教學者參加す。斯る催しの實現に感動す。彼の活躍を支へし同志數人を誘ひ先斗町料亭ちもにてご苦勞會を催す。彼の父住職にして布教の爲渡米し、彼の出生地は桑港なり。戰爭中歸國、小學六年にて花卷（岩手）に轉校せり。反米の時節なれば彼は學校にて酷薄なる苛めに逢ふ。余は別の組なりしが内緒にてこれを耳にす。未だ親しからざれども同じ町内の友人たる者救ふ事能はず甚だしき無念を覺ゆ。慚愧の念四十五年に及ぶ。中學より友人となるも謝る機會なし。今謝罪せんとて先斗町に誘ひぬ。彼數人に傳へたる由なるも何んと二十五人集ふなり（外國人二十人）。ちもとには皇居以外になき謂れある七段飾りの雛人形が飾られぬ。吾「日本には女の雛祭りあり。お内裏様とお雛様、參人官女に五人囃子、兩脇に弓矢持つ左大臣、右大臣守りて、左近の櫻、右近の橘あり。女性を稱ふる慣はし」と説く。

男の祭如何に！何故にそは盛んならざるや！と質問攻めに困うじ果てぬ。席料の高さに困惑せるも一先づ山折氏に謝罪や果せる。

その上世界の有識者に日本を少しや理解せしめ得しと、自らに満足せしものなり。それにて雛祭が優美にして女性を稱ふる風習は何んと良き事か、今一度見直したき氣持なり。